女人芸術 誌上のアナ

曇り日の独白(藤森成吉氏への公開状) 「女人芸術」アナ・ボル論争 目

八木秋子氏へ(公開状について一言) 小ブル藤森成吉に与う

簡単な質問(藤森成吉氏へ) 凡人の抗議

アナーキズムへの一抗弁 高群両氏のアナーキズムに対する駁論

お出でなすった --アナー キストの宣言

ルジョアイデオロギ

再びアナーキズムを駁す 隅田氏の妄論を駁す キズムの顕落

八木秋子

藤森成吉 高群逸枝 昭四・ 昭四・

八木秋子 昭四・

中島幸子 昭四·

隅田竜子

昭四・

とプロレタリアの自由 高群逸枝 阳四 . =

八木秋子 松本正枝 昭四. = =

中島幸子 昭四• 昭五.

隅田竜子

阳四

八木秋子 昭四• 九九八七

0

というやや時節外れの感さえもあるアナ・ボル論争を、女性文学者

てた「曇り日の独白」の一文があり、これが一九二九年(昭和四) 子、平塚らいてう←伊福部敬子、と並んで八木秋子が藤森成吉に宛 <公開状>のなかに、小林 多喜二←松田 解子、中川 紀元←熱田 優

「女人芸術」の創刊一周年の記念号(一九二九年七月号)の特集

Ш

清

たちの間にひきおこした。アナキスト八木秋子のその公開状にはす

くなくとも二つの問題が提出されていた。

時代のプロレタリア的現実への詠歎的肯定の態度はまだし、 りの転換(藤森のプロ作家への転向・注)の動揺と新しい形式の模索 当事の収穫とは認めるが、『何が彼女をそうさせたか』『親友』あた 門」も個人主義から社会主義へ、自然主義から目的性文学へ移った 雀』などの人物は深い人間愛から 描かれたものだった。『礫茂左衛 を感じてきた。『東京へ』のおその、『北見』の青ちゃん、『甚床』 『雲 一つは、「私は藤森氏の初期の作品に滲む謙虚さにながい間牽引

ある。 批判しつつ「インテリ作家としての藤森氏は今後はいかなる歩みを 得たが、最近の『土堤の集会』『十万円事件』『光と闇』『ツバ がった観念の遊戯を合理づけてゆくのかしら?」とまでいったので 戯画化されてさえいる」と批判を加え、「今後は現実の上に跳びあ うべきからざる詠歎的自己肯定と必然性のない観念の飛躍によって マンチシズムがあり、センチメンタリズムがあり、むしろ近頃は救 森が「マルキシスト作家に移っていった経路には一貫して色濃きロ こともこの公開状発表の一因かとおもわれるが、その彼に向けて藤 木秋子が郷土的近親感をヒューマニスト作家藤森成吉に寄せていた その転向の根底にたいして疑問がひろがっている。長野県出身の八 疑問の背後には片岡鉄兵ら文壇作家のプロ作家への相つぐ転向の、 つづけられるであろうか」と疑問を投げかけたことであった。この に至っては観念的ロマンチストの哀しい騎士の姿、 のようだ」と

られない。林房雄氏や片岡鉄兵氏などは通俗プロ作家である事 心の真実性をもつ藤森氏が個我を歪めて意識の縄に自らを縊り、 を、みずから肯定し、ある意味では生活の為に書いているのだと そのイズムの政治的目的のためああした観念技巧の作品を世に出 してゆかねばならないとは、何とも矛盾ではないか。」 いう態度をわれ人ともに認めている。一しかし少くとも階級的良 「今日までの氏の作が真個の個性から生れたものばかりとは考え

「自由性は抹殺されて作品はいきおい画一的とならざるを得ない。」自由性は抹殺されて作品はいきおい画一的とならざるを得ない。(実はイズムの政治的目的への効果)に置いている上は、作家の(実はイズムの政治的目的への効果)に置いている上は、作家の「国力」といっている。 「プロレタリア大衆と叫び、反抗をぶちまけてみても、 藤森氏の

> 問題にされているのであり、そのことを通して公式主義の作品を書 惑に重ねて作家藤森成吉がプロレタリア作家であることへの不信が のである。 くことを強いる(?)マルクス主義プロ文学への疑問が提出された つまり、プロレタリア文学の公式主義な作品の文学的価値への疑 社会的普遍性において無産者の心をもつものとはいい切れまい。」 現在(プロレタリア作家となった現在・注)の作品が初期のものより

は私に少しばかり思想の話をされた。私の顔をみつめていった。 については、前記の、作家藤森にたいする疑問提出以上の 積極さ いった」という藤森の言葉にたいするもので、八木秋子はこのこと ズムとマルキシズムは、理想は同じ、だが手段方法が違うのだ>と の相違と科学的必然性を持つか否かにあるのです>とか、<アナキ も違いませんよ。全く同じですよ。ただ、それへ達するまでの過程 <マルクス主義とアナキズムの理想とする社会は究極において少し 八木秋子の出したもう一つの問題は、「-次のように言っている。 会合のあったあと、氏

とかに現われる。 こむ。人口に対する支配の代りに、事物の管理と生産過程の指導 域から他のそれへと漸次不用となり、 「一エンゲルスばいう。『社会関係への国家権力の干渉は、一領 国家は廃止されるのではなくて死滅するのであ かくて遂におのずから眠り

うとも、 裁支配の必要も可能性もなくなって眠りこむ時代がよしんばあろいる。しかもこれほど深い両者の溝渠はないのである。たとい独 この時の状態は一見、無産階級支配のアナ それは民衆が権力の支配に慣れ、 奴隷の服従を服従と意 ーの社会に似て

これは「幸福な社会生活は自発的創造的意志によって生れる」というアナキズムの主張の一つに沿うものであり、プロレタリアの独裁的権力によって国家を完全に運営すればやがて無階級無支配の社が違う」のではなく、「方法が異るのは理想がちがうからではないが違う」のではなく、「方法が異るのは理想がちがうからではないか」というのである。かく独裁と権力に真向から否定を投げつけたことから「女人芸術」誌上にアナ・ボル論争が展開されるに至ったことから「女人芸術」誌上にアナ・ボル論争が展開されるに至ったことから「女人芸術」誌上にアナ・ボル論争が展開されるに至ったのである。「藤森への公開状」は文学の問題として始められたものが、その同じ文章のなかで当の八木秋子によって逸早く、革命と政が、その同じ文章のなかで当の八木秋子によって逸早く、革命と政がある。

された。

「八木秋子氏へ(公開状について一言)

僕への公開状拝見しました。

アートの自由とは云われない)だの、『権力』(あなたは決してブを悲しみます。 今 更『人間の自由』(あなたは決してプロレタリび、然もあなたの飽くまで小ブル的な見解が打破されなかった事僕の言葉に従って『国家と革命』を御よみになった事 を よ ろ こ

脚で、アナのあなたと論争する気はありません。ただ、あなたが もっと勉強され、小ブル的意識を抛棄される事を望みます。あなたがたは非常に完全に小ブル的意識を抛棄される事を望みます。あなたがたは非常に完全に小ブル的である危険がある。

44

(1929・6) (1929・6) と明瞭にしておきます。誤解を 避ける 為に。」 とでで、 とは、全く同じだ。」と明瞭にしておきます。 誤解を 避ける 為に。」 にだ一言、僕の言葉として、引用なさった文句を『マルクス主

で藤森からアナキスト目がけて発射されたのである。で藤森からアナキスト目がけて発射されたのである。 言葉 このみじかい返事のなかにたびたび出てくる小ブルという 言葉 このみじかい返事のなかにたびたび出てくる小ブルという 言葉 で藤森からアナキスト目がけて発射されたのである。

2

しても、この小ブルという 言葉は そっくり 貴方に 返すべきもの、ストが自分達以外の者等に対して投げる一つの常套語だと通俗に解 一次、高群逸枝は「小ブル藤森成吉に与う」を かい た。 八木は 藤森成吉のこの返事にたいして翌九月号に八木秋子は「簡単な質

藤森の小ブルという言葉にかみついた。 親切にもいわれる。しかも私は勉強することによって残念ながらい親切にもいわれる。しかも私は勉強することによって残念ながらい非常に完全に小ブル的である危険があるから勉強せよと、あなたは

踏んまえたもので、プチブルなどというのは、非プロレタリア的と 派の岩藤雪夫などと互に小ブル・プチブルとやりあっていた事実を とではない」といった。この云い方はそのころ戦旗派の藤森が文戦 がら、他の人を小ブルと評して笑うなどということは智恵のあるこ らぬ。<雑魚のトト笑い>といって、正札つきの小ブルの身でいな にとっての<尖鋭>な闘争であるのだろう。―藤森氏がこの安っぽ 小ブル、プチブルとの投げっこで、こうした言葉の遊戯こそが彼等 味方、否味方同志すらが、それ小ブル、いやプチブルといった具合 と、これまた当時論敵征伐の常套の一つだった小児病を 持ち 出しルという言葉の濫用などたしかに一種の小児病的なそれであろう」 ののように、すぐさま投げつけられる時代であった。 いうくらいの意味だが、それが何か相手に致命的な一撃を与えるも い言葉で八木氏に答えたとて、それは自身を傷つけることにしかな で、乱射乱発雨あられだ。―いやはや何が何だか分らない。お互に プチブルと罵ればそれだけで一の致命傷を与えたことになる。―敵 「一彼等はこの言葉一つで、その価値を取り決める。小ブルといい 高群逸枝は、その題名からしてなかなか戦闘的で、「今日、小ブ

ころである。

はいうが、どこがそうか、細かに云ってもらいたいものだ。<非「アナの人は非常に完全に小ブル的である危険がある、と藤森氏

る危険がある〉ととを知るだろう。」 る危険がある〉ととを知るだろう。」 はって小ブル的であなって、無産者は、人政治主義は非常に完全に小ブル的である。 彼等はあまりに〈実際的〉になりやすく、従って妥協的、 ある。 彼等はあまりに〈実際的〉になりやすく、従って妥協的、 ある。 彼等はあまりに〈実際的〉になりやすい、従って小ブル的な危険政治的であるから非実際的になりやすい、従って小ブル的な危険

「人すでにアナキズム及びサンジカリズムは完全に清算されている、百の議論よりもこの事実が何より有力>とすこしの疑いもなる、百の議論よりもこの事実が何より有力>とすこしの疑いもな全に清算されたではないか。わが国の無産運動は政治運動への展開とともに、はじめにアナキズム(及びサンジカリズム)を否定し、次に共産主義を、そして今後には明らかに社民主義への進展し、次に共産主義を、そして今後には明らかに社民主義への進展となり、さて然る後には資本主義への合同となるのである。」

程の名において〉なした声明を列挙してみせた。じ無産党の陣営にあっても過程が幾段階かに分れ、それが悉く<過この主張の例証として高群は、当時の日本の各無産政党が、「同

「極左主義の輝ける指導精神が見棄てた卑俗な現実の大衆(労働「極左主義の輝ける指導精神の結果する宗派的分裂にかえるに、大衆的党であ極左的指導精神の結果する宗派的分裂にかえるに、大衆的党であり戦線統一党であることが現下の無産党の現実の大衆(労働、無産大衆党)

するかに力点を置く。」(日本大衆党)
バクロ戦術、破壊的運動よりは建設的な方面、大衆を如何に動員バクロ戦術、破壊的運動よりは建設的な方面、大衆を如何に動員「大衆的戦線統一党であるとともに、指導内容も大衆的であるこ

46

した無産大衆の道である。」(社会民衆党)した無産大衆の道である。」(社会民衆党)とは無正運動を進める。共産主義は無産階級の一部が無産階級の他の無産党の独裁政治で、現にロシヤでは共産党のみが合法的で他の無産党は存在を許されぬ。さらに注意すべきは共産党内部にも民主主党は存在を許されぬ。さらに注意すべきは共産党内部にも民主主党は存在を許されぬ。さらに注意すべきは共産党内部にも民主主党に存在を許されぬ。さらに注意すべきは共産党内部にも民主主党に存在が、場所の独立のである。」(社会民衆党)

らさらに、といくつもの過程が見出されることは当然である>といい、そこかか、に立って主張しているが、かく過程の観念に踏み入ったら次々かとに紹介したように各無産政党は<それぞれ必然とか、段階と

したことからの、逸脱である。」
に被支配階級がもつ権力か、強制等の方が彼等にはむしろ近いのではないか。かくて彼等は意識も方法も支配階級と一つのものになる。配階級がもつ権力か、強制等の方が彼等にはむしろ近いのではないか。かくて彼等は意識も方法も支配階級と一つのものになる。

目標より道程を重しとするマルクス主義では、過程としての権力意関する限りラッサーレに近づくものとなるというのである。かくての透明な事務的機関としての国家」というに至っては、このことにの透明な事務的機関としての国家」というに至っては、このことにの透明な事務的機関としての国家」というに至っては、このことにの透明な事務的機関としての国家」というに至ったのであり、マルクス主義者はこれを肯定する」かの如く云うに至ったのであり、マルクス主義者はこれを肯定する」というに至っては、このことにの透明な事務的機関としての国家の意識を重視し没頭することを書いた。マルクスの弟子にちがマルクスが持っていた自由にたいと書いた。

この折しい女者の言葉を この折しい女者の言葉を となり、革命的活動的であればあるほど、例えばレーニン主義が現 となり、革命的活動的であればあるほど、例えばレーニン主義が現 識への没頭による堕落(自由からの堕落・注)を避けることは 不可能

信ずべきだろうか

平和の使徒なのであろうか

人々は

ついに来たことを喜び祝っている平和と自由の社会のいまや絶対に彼を信じている

だが彼もまた

泥棒狼でありはしないのか? 羊の群を襲うて刧掠するところの 平和の使徒の仮面の下に

つよい否定をつきつけたのであった。でルクス主義自体をも否認するに至らんとすると、政治主義への際へ移るにしたがって社会民主主義からさえもさらに後退し、やが際へ移るにしたがって社会民主主義からさえもさらに後退し、やがなの中枢部に確立強化して独裁たらんとし、今一方は、理論から実家の中枢部に確立強化して独裁に至らんとすると、政治主義へのであった。

への追従に反対を提出することによって、高群はボルシェヴィキを崩壊し、プロレタリア階級が国家の支配者になるという簡単な公式資本主義経済組織の発展の行きつくところとして資本主義は没落

狂信的楽天主義として批判したのである。

深い興味を経済方面に持たずにはいられない。」 深い興味を経済方面に持たずにはいられない。」 深い興味を経済方面に持たずにはいられない。」 深い興味を経済方面に持たずにはいられない。」 で然るにフォードにあっては、一九一四年に一日八時間制と最低「然るにフォードにあっては、一九一四年に一日八時間制と最低「然るにフォードにあっては、一九一四年に一日八時間制と最低「然るにフォードにあっては、一九一四年に一日八時間制と最低「然るにフォードにあっては、一九一四年に一日八時間制と最低

へと移行させ、必ずしもマルクス説を裏書きしない――」 「科学の進歩は機械を発達させてプロレタリアを減少消滅させ、「科学の進歩は機械を発達させてプロレタリアを減少消滅させ、「科学の進歩は機械を発達させてプロレタリアを減少消滅させ、

の事態に徴して示唆深いものがあったといえよう。しかしボルシェきが独裁国家の性格をむき出しに外部に見せていなかった時期に、をころは正確緻密とはいい難いとしても、マルクス主義経済学にともかくこのような批判を述べ得たのは、資本集中説を素朴に信用しなかったアナキズムの立場の 故かと思われる。「世界戦争(第一次なかったアナキズムの立場の 故かと思われる。「世界戦争(第一次なかったアナキズムの立場の 故かと思われる。「世界戦争(第一次主義諸国家に於ける資本主義は、それ自体のより以上の発展と変貌によって更に寿命を延期されよう」という見方には、第二次大戦後によせてほどにはソと、このように高群の発言は、第二次大戦前後に見せたほどにはソと、このように高群の発言は、第二次大戦前後に見せたほどにはソと、このように高群の発言は、第二次大戦前後に見せたほどにはソと、このように高群の発言は、第二次大戦前後に見せたほどにはソと、このように高群の発言は、第二次大戦前後に見せたほどにはソと、このように高群の発言は、第二次大戦前後に見せてほどにはソと、このように高群の発言は、第二次大戦後に見せてほどにはソと、このように表情に関している。

意しておきたい。

だオキ政権のロシアに於ける成立によって、世界革命も遠からずとヴィキ政権のロシアに於ける成立によって、世界革命も遠からずとでは、これと対立論争した側にもボルシェヴィキ 即正 統マルクス主義 (これと対立論争した側にもボルシェヴィキ 即正 統マルクス主 は、これと対立論争した側にもボルシェヴィキ 政権のロシアに於ける成立によって、世界革命も遠からずとヴィキ政権のロシアに於ける成立によって、世界革命も遠からずとヴィキ政権のロシアに於ける成立によって、世界革命も遠からずとヴィキ政権のロシアに於ける成立によって、世界革命も遠からずとヴィキ政権のロシアに於ける成立によって、世界革命も遠からずと

3

議」の鉾先は<プロレタリア独裁>にむけられている。 つづけてその翌月、「女人芸術」十月号の八木秋子の「凡人の抗

に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。自己犠牲の崇高な精神である。すべての抑圧が取去られた建設の途上にあっては、解放された民衆のすべてに内圧する自発組織力、生活が花のように一時的た民衆のすべてに内圧する自発組織力、生活が花のように一時的た民衆のすべてに内圧する自発組織力、生活が花のように一時的に目を開いて、協同作業にとりかかる。民衆のこの協同は本質的に目を開いて、協同作業にとりかかる。民衆のこの協同は本質的に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権的で、支配的ではない。経済的には地方分散経済、自給自に非強権を対象を表する。

程の自由コムミュンに向けて強く大地に歩みはじめる。そこには 民衆の自由宣志による統制があり、組織があり、発見と協力と伸張 とがある。強制と支配と、銃剣のきらめきによる革命で保たれる とがある。強制と支配と、銃剣のきらめきによる革命で保たれる とがある。強制と支配と、銃剣のきらめきによる革命で保たれる とがある。強制と支配と、銃剣のきらめきによる革命で保たれる とがある。強制とすべての経済関係を、自治本能を、性情をゆがめつ つ、無欲の矛盾を内包しながら進んでゆく。自由は本能であり、本 でナキズムもこのように、社会を動かす心臓と血である。」 アナキズムもこのように、社会を動かす心臓と血である。とい アナキズムもこのように、社会を動かす心臓と血である。とい アナキズムもこのように、社会を動かす心臓と血である。」 「凡人の抗議」における八木の論調はせっかちにすぎ、ソビエット で、大きな表現で強調されるとなれば、とたんに個人の内部における に非難を向けつつ、アナキズム的公式にすがって、そのためひどく、 で、社会を動かす心臓と血である。この で、大きな表現で強調されるとなれば、とたんに個人の内部における で、大きな表現でよる。この で、大地に歩みはじめる。そこには との自由コムミュンに向けて強く大地に歩みはじめる。そこには との自由コムミュンに向けて強く大地に歩みはじめる。そこには といったものをバックにしているかにも見える。

である。 である。。 である。。

ころから論じていて、次のことを強調した。 というととして、バターニンは集散主義、クロポトキンは共産的、というととして、バターニンは4個人主義的、バクーニン、クロポトキンを集団的バクロし、マルクス主義の精髄と比較対照する」ために、スチルナバクロし、マルクス主義の精髄と比較対照する」ために一その欠陥を中島は「アナーキズムの理論発展を考察するために一その欠陥を中島は「アナーキズムの理論発展を考察するために一その欠陥を

自由はあるのである。この限りでは高群氏のいわれるが如く、マ て、必然を理解しての自由であって、合則性の認識のうちにのみ を説明することはできない。そして彼等の自由の表象は、必然の い、が人間性を最高審判とするアナーキストは、人間の社会革命 なる自由世界の展開にあることで これには 何ら 異る ところはな る。だがマルクス主義は、形式論理学的な否定ではなくて、 ぬのである。」「マルクス主義がアナーキズムを反駁する時、又そ るに相違ない。然しマルクス主義の自由は思惟の産物ではなく 概念を隠蔽する。此の限りでは該自由は盲目的必然性に飜弄され 「マルクス主義のアナーキズムとの共通なる個所は、その究極的 弁証法の視野の下で究明し得る。」 理論ではないのである。マルクス主義は、社会の運動法則を唯物ズムには階級闘争理論が欠けている。それだけでも厳密な科学的理と生産過程の指揮とが現われた時、自ら死滅する。」「アナーキ をも弁証法的な否定をする。即ち階級対立の不和解性の生産物と 公的権力の集中である>となすアナーキストは、国家を否定す れの反駁される時、最も問題となるのは国家論である。<国家は ルクス主義はアナーキズムの一範疇たり得ない。又あってはなら しての国家は、その本質たる階級に対する統治の代りに事物の管

「八木氏は、ソビエットロシアの独裁を云々する。勿論独裁には

権力が必要である。その限りではアナーキズムの反駁の対象となり得る。一だが外にあってはロシアをめぐる資本主義国家の攻り得る。一だが外にあってはロシアをめぐる資本主義国家の攻り得る。一だが外にあってはロシアをめぐる資本主義国家の攻上は共産党の独裁であると、然り、一切の革命的行動は党なくしては成功は望み得ない。プロレタリアートには、その最も自覚せては成功は望み得ない。プロレタリアートには、その最も自覚せては成功は望み得ない。プロレタリアートには、その最も自覚せては成功は望み得ない。プロレタリアートには、その最も自覚せては成功は望み得ない。プロレタリアートには、その最も自覚せては成功は望み得ない。プロレタリアートには、その最も自覚せる最もよく組織せられたる部分の意見の活動なくしては自己を資本主義的搾取の類絆から解放することは不可能である。又階級の前衛市る党の存在を否定するものは、永久に経済主義に堕する小児病である。」

「高群氏は、資本主義アメリカに革命なく農業国ロシアに革命の「高群氏は、資本主義アメリカに革命なく農業国ロシアに革命当主義の環として存在する国家の変革の過程は資本主義発達の程度を問題としないのである。ロシア資本主義についてロシア革命当を問題としないのである。ロシア資本主義についてロシア革命当を問題としないのである。

得ない。」

人は常に恣意的に物事を解釈する。然し事実は唯一つしかあり

論争や汎マルキシズム論争を経てボルシェヴィキ論争に突入しかけ対立のみである。しかし、この明快な中島の反駁によって、小ブルしかない。あるのは立場の相違と理解の相違とに由来された主張のこの中島幸子の論述はすこぶる明快である。まったく事実は一つ

たといえるところにまで進んできたといえる。

芸術」誌上のアナ・ボル論争は、ここにアナ・ボル論争としてよう 論もこの立場に立脚しているもののごとくであったが故に、「女人 ばかるところなく誇号したのであった。中島幸子のつよく明快な反 革命的であり、マルクス・レーニン主義のみを、即ちボルシェヴィ 過程で、極左的傾向をつよめるそのことによって、かえって指導力を 現を疑問とせぬばかりか、それへの到達の当面する手段として、 制約される。当時の非合法な共産党の立場から見れば、革命党とい やく再出発したと見られるのである。 キ (当時非合法の日本共産党) のみが唯一の革命党であることをは の指導方針に従ったものであり)、その立場からは合法無産党は反 がわが国に横行したのであり(主体性なくコミンテルンの世界革命 た。だから彼我の現実的条件の相違を完全に無視して直訳的な主張 であるばかりか、それは懸値なしに革命の唯一つの手本でさえあっ から革命の国ソ連の在り方については全くといってい 発揮するかに見え、殊に文化面につよい影響力をあたえていた。だ た。非合法的存在としての日本共産党は、追いつめられてゆくその けて合法政党を結成した、という考え方をひそかにするものもあっ 圧のきびしい日本に於ける適応の手段として、暴力的革命手段を避 うことのできない日本の無産政党も、終局的にはソ連邦的国家の出 が現存する。主張も反論もすべてその事実に基き、またその事実に マルクス主義者にとってはその革命の見本としてソ連邦なるもの いほど無批判

もに、中島幸子のいうアナキズムも亦通俗的理解の範囲を出ないもまで正しく理解されていたか、その こ とに 疑問がもたれ得るとと八木秋子、高群逸枝に、マルクス主義―ボルシェヴィズムがどこ

中島幸子と並んで隅田竜子の「八木、高群両氏のアナーキズムに中島幸子と並んで隅田竜子の「八木、高群両氏のアナーキズムに

③政治行動を否定するアナーキズムは反動的ユートピアである①氏らのいう自由と、我々の自由との根本的相違

④プロレタリアートは如何に議会を利用するか

③何故にプロレタリア独裁は必要か

⑤過程は何であるか

⑥小ブルジョアは何人であるか

⑦機械の発達はプロレタリアをなくするか

市島豪琛或言の返事のないて「『人間の自由しての、『権 ⑤女人芸術十月号「凡人の抗議」への若干の抗議

という問題でアナのあなたと論争する気はありません」という言葉前掲藤森成吉の返事のなかに「『人間の自由』だの、『権力』だの

があったが、このような自由と権力の理解、それと社会革命とのかわりについての解釈こそ、アナ・ボル論争の永久的なともいえるが立の焦点である。それを現実的具体的にすると「政治行動」の間をなり、独裁、権力、政府という問題を挟んでアナキストと論争するになる。にもかかわらず、そのことを挟んでアナキストと論争するになる。にもかかわらず、そのことを挟んでアナキストと論争するになる。にもかかわらず、そのことを挟んでアナキストと論争するになる。にもかかわらず、そのことを挟んでアナキストと論争するにながらその実は論争回避の態度である以外の何ものも持合せてはれなかった。しかしこの論争の中味そのものは戦後の今に至ってもながかった。しかしこの論争の中味そのものは戦後の今に至ってもなかった。しかしこの論争の神味そのものは戦後の今に至ってもなかった。しかしての論争の神味そのものは戦後の今に至ってもなかったが、このような自由と権力の理解、それと社会革命とのおかて右往左往と不安定きわまりなかった藤森の生き方に直接尾をひくのである。

それにくらべると中島幸子も隅田竜子も、正面からこの課題について応戦し、論争をつづける真摯さがあった。公式主義的な国家消滅必然論のくりかえしに終ったとしても、精一ばいの論争は、わが国においてマルクス主義の及ぼしたひろく強い影響力の影絵をみるように、そこにあの時期の左翼文学者の主張の典型的な思考を見せられる思いすらするのである。

ところで、隅田竜子の駁論の主旨は前掲の八つの項目によって明ところで、隅田竜子の駁論の主旨は前掲の八つの項目によって明ところが、隅田竜子の駁論の主旨は前掲の八つの項目によって明ところは、

である。」である。」である。」

に集中的に表現されている。あらゆる種類の理論的及び実践的日和に集中的に表現されている。あらゆる種類の理論的及び実践的日和に集中的に表現されている。あらゆる種類の過程と、ブルジョアシーの絶望的な没落への過程と、資本主義に集食う右翼改良主義裏切りの過程とこれらをバラバラに切離し、連関する全体の一部として認識され得ない。

であり、さらに、 -社民党も共産党も一しょくちゃにして-」ということになるの

必然を理解し、『次の鎖の一環』をつかむための酷烈な闘争のみの所有者にして始めて可能なことだ。我々は小鳥が空を飛ぶようの所有者にして始めて可能なことだ。我々は小鳥が空を飛ぶようのがあるが、氏らとひとしく、すぐにも自由の社会の来ることを「我々も亦、氏らとひとしく、すぐにも自由の社会の来ることを

というレーニン主義の立場に立つものである。」がプロレタリアに勝利をもたらし、かくして無産階級へ過渡する

どという理想の問題も、それに対する各々の態度は明確化する。議会、労働運動等の現実問題も、自由とか文化またはユートピアなまって、理想的な無支配の社会へ到達しようとすることが、可能でよって、理想的な無支配の社会へ到達しようとすることが、可能でまって、理想的な無支配の社会へ到達しようとすることが、可能でまって、理想的な無支配の社会へ到達したいところのようだ。ここにおというあたりが、隅田の最も主張したいところのようだ。ここにおというあたりが、隅田の最も主張したいところのようだ。ここにお

たことに、「自由」の問題について両者の相違を考えてみるに人アナキストは自由の概念に対してまるで無智である。ブルジョアとプロレタリアの自由の区別を知ろうともしない。プロレタリアが如何にしてプロレタリアの自由を獲得するかも明らかにしない。資本家は労働者のストライキをドロ靴にサーベルで疑りんし、前衛を検挙投労働者のストライキをドロ靴にサーベルで疑りんし、前衛を検挙投労働者のストライキをドロ靴にサーベルでよりんし、前衛を検挙投労の書葉会結社の自由である。個人の自由をではなく、プロレタリアの自由の要求である。>>>と関田の云うところまでは、自由の限別でのではないかと危惧され、「理想は同じ、ただ方法がちがうだけ」のではないかと危惧され、「理想は同じ、ただ方法がちがうだけ」のではないかと危惧され、「理想は同じ、ただ方法がちがうだけ」などとはいいきれないものがあるようだ。それほど距っていては、などとはいいきれないものがあるようだ。それほど距っていては、などとはいいきれないものがあるようだ。それほど距っていては、などとはいいきれないものがあるようだ。それほど距っていては、などとはいいきれないものがあるようだ。それほど距っていては、などとはいいきれないもの問題について両者の相違を考えてみるに人アナキストは自由の概念に対している。

りはとおく見えてくる。

4

ついて次のように論じたのである。 政治主義にある」ことを力説し、特に「アナキズムと政治運動」に 事実、逆理的のようだがわたしは言う。マルキストのなかで力量あ にはゆかない。わたしがわたしの立場から論ずるのは、マルキスト こうとするならば君たちの考え、君たちの運動は行きづまらぬわけ におかれてあると思う。君たちが君たちの運動をまじめに続けて行 に非合法を標望することはあり得る。だから『いわゆる合法』と 弁証法の如何によってその何れをも真正の共産主義とすることがで 義者は彼等と絶対闘争する』というが 会党に至るまで社民主義者でブルジョアの忠僕である。我々共産主 合法主義の立場を取るものだ。彼等合法主義者は無産大衆党から社 お聞き。君は『我々のみが共産主義者で、それは現段階にあって非 高群逸枝は隅田に向って「一アナーキストの宣言」のなかで、「まあ キストの側から松本正枝の他ふたたび高群と八木が登場した。まず の社会民主主義化が、いかんともしがたい必然の過程である一般的 『いわゆる非合法』があるのみ。君は社会主義を絶対的に排撃する きる。第二にレーニン主義の立場に立つとしても合法の仮面のもと 真面目である人であればあるほど堕落してゆく。その原因はその 中島と隅田のこの駁論にたいし、「女人芸術」十二月号にはアナ わたしは、君たちは必然的にいわゆる社民主義に出発する過程 い、それらの陣営は君達から全然飛び離れていると思っている - 第一合法非合法の問題は

「君はどこの馬の骨だね。ある被支配者が支配者の手中を出る出ないは、その戦法如何にあると君はいっている。誤って変な戦法ないは、その戦法如何にあると君はいっている。誤って変な戦法ないは、その戦法如何にあると君はいっている。誤って変な戦法とではないか。そしてそれがもつ戦法もまた自ら内在的に決定せられている。そこでだ、聞きたまえ。無産政党なるものが、果せられている。そこでだ、聞きたまえ。無産政党なるものが、果せられている。そこでだ、聞きたまえ。無産政党なるものが、果せられている。無産政党が無産者の内部から自然発生したまって出る。無産政党が無産者の内部から自然発生したものといなって出る。無産政党が無産者の内部から自然発生したもので、これこそ内在的に決定せられた無産者ので、これこそ内在的に決定せられた無産者ので、これこそ内在的に決定せられた無産者ので、これこそ内在的に決定せられた無産者ので、これこそ内在的に決定せられた無産者ので、これこそ内在的に決定せられた無産者ので、また消費組合運動にしても、何れも無智無学な労働者のなかから自然発生したもので、これこそ内在的に決定せられた無産者の戦法の一生したもので、これこそ内在的に決定せられた無産者の戦法の一生したもので、これこそ内在的に決定せられた無産者の戦法の一生したもので、これによりに対している。

その頃の論争にありがちな揶揄嘲笑をまじえながら、論旨はまたしても対ボルシェヴィキから、対汎マルクス主義に舞いもどるかに見えるが、われわれはここに足を停めることをやめて、「ブルジョア・イデオロギーとプロレタリアの自由」と題して松本正枝がテーア・イデオロギーとプロレタリアの自由」と題して松本正枝がテーア・イデオロギーとプロレタリアの自由」と題して松本正枝がテーア・イデオロギーとの頃の論争にありがちな揶揄嘲笑をまじえながら、論旨はまた

ロレタリアの要求する自由は、弾圧と戦いつつ、ストライキの自一隅田氏などはこの種のマルクス主義者の典型といっていい。『ブーないことを喚めいて問題が解決するかのように思っている。のはらはマルキシズムそのものさえ知らない。自らの理解してマルクス主義者と自称する人々の共通な特徴は図々しき無智で

由、無産階級の自由、×××活動の自由」であって、これはブル田、無産階級の自由と相違するというが、氏の挙げられた自由は、いずれも単なるブルジョア・デモクラシーの自由にすぎない。これなことが今日プロレタリア運動一般の要求している自由であろうか? 氏はマルキシズムはおろか社会主義のいろはさえもしらない。一プロレタリアの要求する自由、即ち近代社会主義運動一般が要求する自由とは生産の自由と消費の自由である。無政府共産主義(クロポトキンによってはじめて用いられた言葉)とは要産主義(クロポトキンによってはじめて用いられた言葉)とは要産主義(クロポトキンによってはじめて用いられた言葉)とは要産主義(クロポトキンによってはじめて用いられた言葉)とは要産主義(クロポトキンによってはじめて用いられた言葉)とは要産主義(クロポトキンによってはじめて用いられた言葉)とは要産主義の自由と、無政治の自由というが、

強している人々』のみが混同しているにすぎない。」 や、自ら拠ると称する立場さえも理解していない。いわゆる『勉々、自ら拠ると称する立場さえも理解していない。いわゆる『勉々、自ら拠ると称する立場さえも理解していない。 いわゆる 『勉々、自ら拠ると称する立場さえも理解しているにすぎない。」

た文章を復刻し、それに詳しい註釈を施して『ボルシェヴィキはマとでドイツの社会民主主義者はマルクスがバクーニンについて書い 太利人ファネリとフリシアは代議士でありアナキストであったこと 四八年のプルードン、バクーニンらの社会主義民主同盟の創立者伊 たアナキズムは最初から議会を否定したのではないとして、一八 した。」などと、松本の記述にはその点注目すべきものがあり、ま ルクス派に非ず、徹頭徹尾バクーニン派であることを証明しようと ラム―方法、形態、組織のなかに、多くの類似点が見出された。そ ーニン派がプロレタリアの闘争の『決定的な方法』に書いたプログ したものを見出すことができなかった。反対にバクーニン及びバク という極めて概念的な標語を除いては、マルクスの中には何も類似 を奪取した時、その形態、その方法、その組織はプロレタリア独裁 にボルシェヴィキが全政権をソビエットに!と叫んでロシアで政権 の最良の機会を失ってしまったことを惜んでいた」という記述や 主義革命を起そうと試みたバクーニンは、コムミュンが、すでにそュン以前の六ケ月間、あらゆる努力を払ってフランスの各地に社会 つやあわてて今度はそれをロンドンから指導しようとした。コムミ を帯びた民衆の反乱を冷眼視していたマルクスは、コムミュンが起 デモクラシーの獲得を叫び、フランスのあちこちの社会主義的性質 る。「コムミュン以前の六ヶ月間、口を酸っぱくしてブルジョ 時期の彼等の動静にまで該博な歴史的知識を有しているかにもみえ 思うに、可成に世界の社会主義運動にくわしく、インターナショ 「マルクスのプログラムは常に民主主義のプログラムであった。故 ル時代のマルクス派とバクーニン派の対立や、パリ・コムミュンの とは直接には関係ない問題である。松本正枝は、この論文によって ワ・

54

とろに結集して、 すぎない」ともいっている。そして松本正枝の論旨の要点は左のと 問題であること、完全に揚棄清算したものであることを注意するに シェヴィキの諸氏が、新しい思想、新しい天啓、新しい手段、新し ルシェヴィキをバクーニンの正統というのではない。ただ今日ボル を引例して「私はボスやクノウ、あるいはアルドレッドに和してボ 問題と考えている多くのことがアナキストにとってはすでに古い

るまでの社会主義、即ちブルジョア的国家主義と一八四八年以後 の社会主義、即ち近代プロレタリアの無政府主義との中間に位す ないという考えは、ブルジョア・イデオロギーである。ボルシェる。一国家がなければ組織がない、政府がなければ力が集中される。一国家がなければ組織がない、政府がなければ力が集中される。 ギーに一歩踏み込んでいるが、後者にたいする確信は前者のイデ 完成されると考えたことにより、近代のプロレタリア・イデオロ ており、一方プロレタリアの解放は国家の消滅をまってはじめて を認めることによって、ブルジョア・イデオロギーを正統に継承し デモクラシーを排斥すると見えた時でも国家の中に大なる改造力 るものである。彼はデモクラシーの信者であることによって、又 「マルクスの位置は、フランス大革命より一八四八年の革命に至 自由と背反するイデオロギーである。」 にのみ闘争を見る宿命的なイデオロギーである。プロレタリアの その排撃するのは、国家の中にのみ力の集中を見、党の独裁の中 ィキはこの点でプロレタリア的でない。アナキストは組織を排 しない。力の集中を排撃しない。仮借なき闘争を排撃しない。

というこの立場から、以下のような批判的結論を下すのである。

組織の賜である。ボルシェヴィキは全政権をソビエットへと叫んで ボルシェヴィキの争いの衝点である。」そしてまた、そのロシアの 化した。ソビエットか独裁か、これがロシアにおけるアナキストと 政権を獲得した後、ソビエットの全権を奪い、単なる統治の機関と 外の資本家の反動と交戦し、その存在を維持し得たのはソビエット 対して次のように言った。 プロレタリア国家の政府をもふくめて、国家における政府の存在に 「ロシアの自党なる大衆は自由ソビエットを要求した。ロシアが内

ることよ! ブルジョアジーはそういって民衆を××の奴隷にす 民衆の自治とイニシアチーブを抑圧する。―外敵を防ぎ、秩序を る。共産党もそういってその宿命的な、致死的な独裁を維持し、 めることはできないという。何とブルジョアジーの寝言に似てい 国内の秩序は保たれない。××がなければ民衆の後れた意識を高 得るものは国家ではなく、レヴォリューションである。××はそ はあり得ない。ブルジョアジーとブルジョア意識を完全に一掃し 維持し、後れた意識を高めるためのプロレタリアの組織は××で 「××(政府・注)がなければ外敵は防げない。×× がなければ の妨害者である。」

ーリンの独裁維持のためのトリックに過ぎないことはトロツキーもジーから<ぶっつぶされる>危険に頻しているという宣伝は、スタいては「現在のロシアが社会主義国なるが故に、世界のブルジョア 義国であるが故に諸外国に狙われるのではなく、勢力均衡のために は、好意をもって対するブルジョア国家も現存する」といったので いった」といって スターリン独裁に 触れながら 「ロシアは 社会主 松本正枝はかくして結論づけるように、現存する革命国ソ連につ

主義一スターリン主義に対立したものであった。 的反自由の道ではないかという考えを、昭和の初期としてはめずら しく明確に主張したもので、それだけにいっそう正面からレーニン か、プロレタリアの自由のためと称するプロレタリアの独裁が永久 であるという考え方が無産階級に自由をもたらすものでないばかり 自由一たたかうためのプロレタリアの自由、それのみが真の自由

論争の最後となった同誌昭和五年一月号の、ボルシェヴィキ側の反 われわれの努力と責任であろう。そのためには「女人芸術」誌上の 思えるが、ふりかえってこの論争から何を見出し得るかは、後進の で、論争の相手を、広場においてキャッチして勇躍したらしいとも 論争は概してアナキズム側が積極的であった。 すでに 劣勢の なか れ以上アナ・ボル双方が言いつのっては、という感想が内外に存在 談会「一年間の検討」昭和四・六)という編集方針ではあっても、 派の、総ての人が言いたいだけのことを言いきって貰いたい。」(座 切る」旨の社告が出ている。主宰者長谷川時雨の「統一しないで各 の片隅に「アナキズムとコンミュニズムのこの度の論争は次号で打 の三つのアナキストの主張の掲載された「女人芸術」(昭和四・一二) 見であったから、特にここでの紹介を控えておこう。そしてこれら 二人の論旨と究極には一つの、反権力、反独裁の主張と自由への意 したからであろうかとも想像される。このおそい時期のアナ・ボル 髙群、松本と並ぶ八木秋子の「隅田氏の妄論を駁す」も、以上の 2

の最後の論文をふくめて、約七ヶ月にわたった論争の要旨は、 用してくりかえされた以外、加えるべき新しいものはなかった。 の中味は、不要ともみえる揶揄とこきおろしの他には、既出の論旨キズムを駁す」という二つとも可成長大な論文であるが、しかしそ が念入りに、マルクス、エンゲルス、レーニン等の言葉を引用し援 それは中島幸子「アナーキズムの顕落」、隅田竜子「再びアナー

る。ロシア革命は、全政権をソビエットへ、の合言葉によって、ソ V ったものはアナキズムとアナキストであった。 目を向け、さらに民衆的立場の自覚に立ってそれに反対の態度をと れる事態となった。ロシア革命の当初からこのような成行に疑問の ビエットに集められた政治権力が、ボルシェヴィキ党に完全掌握さ でなければならないと主張してきた。そのような革命には当然プロ ン主義者は一も二もなく勿論それを最上無二の革命方式とし、それ する考え方の問題でもある。ボルシェヴィキ即ちマルクス・レーニ し内乱に導いてプロレタリア革命を遂行する、という革命方式に対 されたことは、結局はレーニンの、帝国主義戦争を国内戦争に誘引 勢でなおわれわれの前に横たわる問題である。ところでここに論争 に帰着するかと思われる。そしてこの問題は現在においても同じ姿 タリアの独裁、否プロレタリアの名による一党の独裁が必然化す プロレタリア革命と独裁国家の問題(国家は消滅し得るか?)

政に反抗し来たった諸党の力が集中して、ツァーの権力を破擢した とクロポトキンは批評し去ったのである。ロシア革命はロマノフ帝 「ロシア革命は、革命は如何してはならないかを吾々に教訓した」

ってボ 府。かくの如き段階を経て、民衆または労働者の代表という形をと その代表によって形づくられるソビエット連邦中央政権 とその 政 もつ反独裁・反権力・反政府のイデオロギーは、ロシア革命に遭遇 もこの軌道以外のものではほとんど有り得なかった。アナキズムの て割切られる。アナキストの主張における「女人芸術」誌上の論難 がその大多数)という姿で受けとらされたのである。この政府に心 う形においてではなく、労働者(農民)の政府と国民(労働者農民 ったのである。ソビエット組織によって確立された地方自治的政権、 に行動したレーニン指揮下のボルシェヴィキの掌握するところとな 所に成ったものであり、その後の政治権力はその情勢下に最も巧み した以後において実験的に最後的に完成を見たとしても過言ではな よからぬ輩は、 る支配権力の強猛さでは一つではないかという論理は、ボルシェヴ のである。 キ独裁に対する批判を強く含めてアナキストの主張しつづけるも 。国家の枠内ではソビエットも合衆国も天皇国家も、 シェヴィキによる政権が樹立されたとき、政府と民衆とい 反労働者・反革命である、という素朴な想念をもっ 民衆に対す

って展開されたアナ・ボル論争はそのことに帰着し、これはまたアとが改めて要求される。アナキストはそれを否定し、ボルシェヴィキの独裁)が、完全にブルジョアの息の名目によるボルシェヴィキの独裁)が、完全にブルジョアの息のの名目によるボルシェヴィキの独裁)が、完全にブルジョアの息のの名目によるボルシェヴィキの独裁)が、完全にブルジョアの息のの名目によるボルシェヴィキの独裁)が、完全にブルジョアの息のの名目によるボルシェヴィキの社会の性一の手段であるのか、ないのか、について考察することが改めて要求される。アナキストはそれを否定し、ボルシェヴィとが改めて要求されたアナ・ボル論争はそのことに帰着し、これはまたアとで、「女人芸術」誌上で高群逸枝が提出した「過程」即ち過ここで、「女人芸術」誌上で高群逸枝が提出した「過程」即ち過ここで、「女人芸術」

の根本である。

「マルクス主義者は、社会民主主義者の説く未来国家についての 「マルクス主義者は、社会民主主義者の説く未来国家についての に反してマルクス主義に拠ると国家は他階級を圧迫するための に反してマルクス主義に拠ると国家は他階級を圧迫するための に反してマルクス主義に拠ると国家は他階級を圧迫するための に反してマルクス主義に拠ると国家は他階級を圧迫するための に反してマルクス主義に拠ると国家は他階級を圧迫するための に反してマルクス主義がないるだけに過ぎないだろう。是 を主張するに反してマルクス主義は、その弁証法的な止揚を意味 を主張するに反してマルクス主義は、その弁証法的な止揚を意味 を主張するに反してマルクス主義は、その弁証法的な止揚を意味 している。つまり資本主義社会と共産主義社会の中間には前者か い後者への革命的変化の時期が横たわる、この政治的と連携を を主張するに反してマルクス主義は、その弁証法的な止揚を意味 を主張するに反してマルクス主義は、その弁証法的な止場を意味 を主張するに反してマルクス主義は、その弁証法的な止場を意味 を主張するに反してマルクス主義と、この政治的段階に関しては無智文 なアナーキストの理解し得ぬマルクス主義の精巧さを実践的 に証しているのである。」(中島幸子)

のアナーキストの黙許し難い権力の問題である。 が開権力は万悪の根源であるとして、歴史の必然たるものが、権所開権力は万悪の根源であるとして、歴史の必然たるものが、権所関権がは万悪の根源であるとして、歴史の必然たるものが、権

る者のみが、真正なマルクス主 義 で あ り、戦闘的唯物論者であ然し階級闘争の承認を、プロレタリア支配の承認にまで拡大す

ムを、この点で空想だとしたい。」(同右)

「マルクスは国家をば歴史的な発達段階における社会の生産物として見る。即ち社会が階級的に分化した時に生成した階級支配のして見る。即ち社会が階級的に分化した時に生成した階級支配のして見る。即ち社会が階級的に分化した時に生成した階級支配のして見る。即ち社会が階級的に分化した時に生成した階級支配のして見る。即ち社会が階級的に分化した時に生成した階級支配のして見る。即ち社会がと「マルクスは国家をば歴史的な発達段階における社会の生産物と「マルクスは国家をば歴史的な発達段階における社会の生産物と

くて、プロレタリアートは何故権力を必要とするか? 一つにはブル「プロレタリアートは何故権力を必要とするか? 一つにはブル「プロレタリアートは何故権力を必要とするか? 一つにはブル「プロレタリアートは何故権力を必要とするか? 一つにはブル「プロレタリアートは何故権力を必要とするか? 一つにはブル「プロレタリアートは何故権力を必要とするか? 一つにはブル「プロレタリアートは何故権力を必要とするか? 一つにはブル

進しなかったのだといっていい。中島は、プロレタリア独裁国家ができない。その限りでは論争は大正のアナ・ボル論争から半歩も前ものではなく、まして反権力主義のアナキストを納得させることはいう見方は、善意に輝いてはいるが、ひろく完全に他を説得し得るいう見方は、善意に輝いてはいるが、ひろく完全に他を説得し得るいの機関が自己の機能を 果して 任意に 死滅するであろう」と 級支配の機関が 自己の機能を 果して 任意に 死滅するであろう」と をがり できない。その限りでは論学は大正のアナ・ボル論争から半歩も前できない。その限りでは論学は大正のアナ・ボル論争から半歩も前できない。その限制では、対応といっていい。中島は、プロレタリア独裁国家ができない。その限制を対している。

役目を果たし終えてやがて消滅するものだ、という見通しを科学的 的、小ブル的と難じたアナキストの、プロレタリア独裁の過程を認 半に至ってもなお、そのことは不可能であろう。中島幸子も隅田竜 近い。三十数年前に不可能であったばかりでなく、一九六〇年代後 であろう。もちろん、それは容易にできることではなく、不可能に に向うかという科学的で具体的なプログラムを必要とすると考えた を歩んで、どの程度にまで社会主義が発達したときに、それが消滅 い。しかし科学的に説明するとなれば、如何にして、如何なる段階 に説明しなければならないことを知っていなかったので はあるま 子もこの点では極めてファナチックといってよく、彼らが非科学 内在しているが、中島幸子の「国家は他階級を圧迫するための一階 が止むを得ない必要性だと見るアンチ・ヒューマニズムの考え方が に到達するための方法のみが異る」といったその言い方には、権力 きない。藤森成吉が「アナーキズムとマルキシズムは無政府の社会 めずという革命論と、具体的ならざることでは特に距たることはで 命となり、ヒューマニズム文学も芸術も生活も、それらの一切が国 それ以外のものは存在することが許されず、国家消滅の思想は反革 えの責任者であるとすれば、すでにそこには「国家」以上の、また の抑圧の機関であり且つ共産主義社会建設のための経済機構編成替 革命後のプロレタリア国家の権力がブルジョア階級の反革命的行動 級の組織的な力である」には、ここには国家権力への信仰がある。 条件の守備体勢にその権力が駆使される、 国家権力は、国家廃止のためよりも、国家権力の統治に従わざるも 家の権力の枠内に圧縮されざるを得ないことに思い至っていない。 のを罰し放逐することに、まず発動する。国家権力を現存せしめる ということをアナキスト

なかった。

論であり、革命ロシア論争という傾きがつよくあった。現存しているのだ、という誇示があり、それに対してアナキストは現存しているのだ、という誇示があり、それに対してアナキストはだが、ボルシェヴィキ側の論拠には、常にソビエット・ロシアが

て革命論争に逸脱し、そこで一方からはマルクス、エンゲルス、 は、八木秋子がいい出した「文学」の問題から、当の八木をも含め かかわらず兎角論旨が移動し、放言とやっつけが大半を占めたのり得なかったのであろう。この論者達は相当の物知りである、にも 多々あったが、これでも昭和初期には論争として受けとられたかも 面する問題とはかけ離れて、誹謗に堕し勝ちであった。バリ雑言は の存在する限り、真の地方自治ができるか?」のように、論争の当 内閣の言ったことではないか、一思うても見よ、資本家地主の政府 批判し曝露し完膚ないまでに、レーニン、あるいはローザ・ルクセ トの地方自治や自由コムミュンの主張に対して「アナキズムの地方 てネチャエフらの言動をまで粉砕して見せるが、 ンブルグ等の言葉を援用してロシア革命当時のアナキスト又は遡っ ーニンが、相手方からはバクーニン、プルードン、クロポトキンが から遠い問題であった故に、論争はかく浮わついたものとしか成 れないが、革命、共産主義社会などという問題は、実際はわれわ 隅田竜子の長い論文も、それ自体としては歴史的にアナキズムを 地方自治、とは労働者農民を投獄した直接下手人、田中反動 たとえばアナキス

作者としての誠実という問題であって。「女台り目りつこうに見なれ、一八木秋子が藤森成吉に向けた質問のはじめは文学のことであり、論、当時の社会的現実問題からもほとんど離れがちの感があった。登場するという羽目になり、昭和四、五年の日本の文学 運動 は 勿登場するという羽目になり、昭和四、五年の日本の文学 運動 は 勿

58

ろく左翼文学の、政治への弱さを示す以外のものではなく、 設問が、八木自身からさえも忘れられたことは、当時における、ひ 文学の革命運動への非人間的な従属は承服しがたい、という意味の に提起されたことなど考えてみようともしなかった。 の発想はまったく文学とは無縁の人かと思われた。問題が文学の上 **論争」につっこんでしまった。松本正枝、** であったが、それすら文学的論争を止めて一途に「アナ・ボル革命 ちが意外に文学的でなかったことも理由であろう。高群逸枝は詩人 政治的価値の方が問題視される季節でもあったのである。そしても 飛躍して文学が置去りにされた。作品の文学的価値より 品を書くのが正しいのだと強く言えるにはヒューマニズム作家藤森 できず、 う一つは、 にためらいがあったのかもしれない。そこから、問題が革命論争に いか。党の方針の命ずるままに、革命のために最も手近で必要な作 属していた藤森はこのいくらか痛い質問の痛味を自ら感ずることが りいくらか痛い質問だったのではあるまいか。しかし当時ナップに には藤森の心中に何かのためらいがあったのではあるまいか。つま 家と革命」などを持出したのは、八木の質問にストレー まいか、というととであった。藤森がやや高飛車にレーニンの「国 的な作品を書く」ことが人間に誠実な作家にとっての矛盾ではある 作者としての誠実という問題であった。 したがって質問に正当な回答が出来なかったのではあるま 論争の場は文芸雑誌でありながら、この論争の当事者た 「政治的目的のために観念 中島幸子、 隅田竜子ら £, トに答える 作品の

ナキスト八木、高群のアナ・ボル論争であったことは、記憶に値いすされた、戦前最後のアナ・ボル論争であったとしても、同一誌上に展開しかし、この論争の実のりは弱かったとしても、同一誌上に展開しかし、この論争の実のりは弱かったとしても、同一誌上に展開された、戦前最後のアナ・ボル論争であったことは、記憶に値いすることである。

6

の「女人芸術」(昭和五・二)にかいた 八木秋子の「文学時評」の冒い、悪いという。何によってその価値が決められるのか? はは単なる主観であろうか? は徳であろうか? でん芸術」(昭和五・二)にかいた 八木秋子の「文学時評」の冒かい、悪いという。何によってその価値が決められるのか? 可い、悪いという。何によってその価値が決められるのか?

ゲモニーを獲得しつつあった。ことごとくマルキシズムの理論のであった。この間にプロレタリア批評家は漸次現文芸におけるへ化、プロレタリア・リアリズム、あるいは芸術批評の規準につい化、プロレタリア・リアリズム、あるいは芸術批評の規準について社会的価値と芸術的価値の二元論か一元論かの問題、等々。一戦われたいくつかの論争は、大衆自身にとっては縁の遠いものであった。ことでとくマルキシズムの理論のであった。ことでとくマルキシズムの理論のであった。ことでとくマルキシズムの理論のであった。ことでとくマルキシズムの理論のであった。ことでとくマルキシズムの理論のであった。ことでとくマルキシズムの理論のであった。ことでとくマルキシズムの理論のであった。

頭の言葉である。そのときの文章から要約的に二、三の言葉を拾っ

ところ、文芸の自由性は極度に束縛され、失われる。」が本質的に反撥する支配、統制、劃一などが集団的に行なわれる規準のもとに価値を決定さるべきである、といったように。芸術

「新年号の大部分を占めているプロレタリア作品が技巧上、如何に進歩したかについては―あれだけの量の中で汲みとられたものは、公式と模倣の中から挙げられる賑かな叫喚であって、作家自身の関の中からの熱意、反抗、闘い、未来への呼びかけではなかった。」

「謙遜な意味で私は作者その人の偽らぬ言葉がききたかった。」「謙遜な意味で私は作者その人の偽らぬ言葉がききたかった。」

論争の緒となった八木の藤森への公開状の真意も亦かくのごときかもしれないと、遺憾の思いがする。

し、おそらくこうつぶやいたにちがいない。「ふん、俺がすくわれ絶望であることをネチャーエフ救出の希望が生じた時に さえ 認識 ら発して、原罪的な自己の逆理論に達したネチャーエフは、自分がテクニックがあったはずである。しかし農民、雑階級下民の原罪かク、オフラナのスパイのテクニックのはるか上をゆく革命徒刑囚のク、オフラナのスパイのテ てたまるか! ゲシュタポの拷問のテクニック、FBIのGメンのテクニッしかし、すくなくとも、ここには日本の官憲の転向のテクニッ

とまずおわった。 セルゲイ・ネチャ エフの絶対値をあきらかにする稿はこれでひ

1964, 12, 20

(五九ページよりつづく)

問と同質の文学の問題が、論争のどこかに時に応じて顔を出し、ま 作品のなかにヒューマニズムの問題を探りつつあった八木秋子の疑 くりかえし、同じ疑問を提出しつづけるもののようである。 ない。この文芸時評の冒頭の八木の詩のような言葉は、その遺憾を ったく文学の問題から離れてしまうようなことはなかったかもしれ したような生硬な革命論議を展開したとしても、少くとも、藤森の 遭遇したかもしれない。その果に、「女人芸術」の誌上にくりかえ

げに書いている。 この、さらに五ヶ月後の同誌三周年記念号に、 中島幸子が誇らし

ン主義に基調をおいていることは明白に断定し得ない。 「現在の『女人芸術』の指導的理論が全体的にマルクス・レーニ しかし吾

> いる。」 まって、マルクス主義に規準を置く潮流がたかまると共に、『女 ト等々……然し最近の急激な発展を見よ、客観的情勢の激化と相 ている。サンジカリスト、アナーキスト、 が否定し得よう。『女人芸術』は今種々なる方向の思想を網羅し々は女人芸術の構成員が社会主義的意識を持合せていることを誰 人芸術』の陣営内部の意識も漸次統一化されて行く傾向を示して マルキスト、ニヒリス

発売禁止にまでなった。 ×は婦人労働者のために如何に戦うか」(佐野文子)、の記事によって 「プロフィンテルン大会と赤色労働組合運動」(隅田竜子)、「××× マルクス主義プロレタリア文学の雰囲気が覆い、同年九月号は、 事態はまさにそのように、やがてこの雑誌の全誌面を厚く当時の

その機関誌の発行を見ることとなった。(1963・1・8~16) という、おそらくアナキズム思想史上はじめての女性だけの集団と 部敬子の他、平塚らいてう等も同人に加わって、別に「婦人戦線」 ナキズムの側も高群逸枝、望月百合子、八木秋子、松本正枝、伊福 一方、「女人芸術」から脱退したということではなかったが、ア